「畜七日薬過限戒」の研究

富 増 健太郎

1. 問題の所在

「パーリ律」捨墮第23条は病比丘に限り「熟酥 (sappi)・生酥 (navanīta)・油 (tela)・蜜 (madhu)・石蜜 (phāṇita)」の五種薬を七日間、保持することを許可するという規則である⁽¹⁾。その因縁譚を簡単にまとめると以下の通りである。

- ①山中で作業をしているピリンダヴァッチャ (Pilindavaccha) の所へやってきたビンビサーラ (Seniya Bimbisāra) 王はアーラーミカ (ārāmika) を用いるように勧める。この時、世尊はアーラーミカを許可していなかった。そこでビンビサーラはピリンダヴァッチャに許可を求めるように勧め、世尊により許可される。しかしビンビサーラは許可が出ればアーラーミカを与えるという約束を忘れておりそのまま500日が過ぎる。その後、大臣により約束を思い出したビンビサーラは500人のアーラーミカをピリンダヴァッチャに与え、アーラーミカによりひとつの村が形成された。
- ある祭の日、アーラーミカ達が住む村に乞食に行ったピリンダヴァッチャは貧しさのため髪飾りが手に入らず泣いている娘に神通力で作った金の髪飾りを与える。しかしこの髪飾りが原因で娘の一族は窃盗の疑いでビンビサーラに捕らえられる。この話を聞いたピリンダヴァッチャは金の髪飾りが神通力によるものであることを示し娘達を助け出す。
- ②このことにより多くの人々がピリンダヴァッチャを信仰し五種薬を布施する。しかしピリンダヴァッチャはすでに五種薬を持っていたので布施され

たものを他の比丘に与えた。比丘達は得たものを瓶などに入れて蓄えておいた。しかしこれらがこぼれ出て精舎が汚れ、それを見た在家の人々はまるでビンビサーラ王のように贅沢だと比丘を非難した。それを聞いた少欲の比丘は贅沢な比丘を非難し世尊にそのことを申し上げて規則が制定される。

(①②は筆者が付けた)

物語自体には特に問題は見あたらない。しかし「病比丘に限り五種薬を七日間、保持することを許可する」という規則の因縁譚として「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」(上記①の部分)の記述は必ずしも必要とはいえない⁽²⁾。

そこで他の広律における「病比丘に限り五種薬を七日間、保持することを許可する」という規則の因縁譚を検討、比較しなぜ「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」という記述がこの因縁譚に必要だったのかを考察する。なお、律により捨墮法の順番が異なるため、本論では該当する記述を「畜七日薬過限戒」と呼ぶことにする。これは平川彰『二百五十戒の研究』IIを参考にした⁽³⁾。

2. 『五分律』の因縁譚

まず因縁譚に「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述があるものを検討する。「パーリ律」以外で「畜七日薬過限戒」の因縁譚に「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述があるのは『五分律』のみである。その因縁譚は以下の通りである⁽⁴⁾。

①畢陵伽婆蹉は楞求羅山にとどまっていた⁽⁵⁾。その時、瓶沙王がやって来て守園人をもちいないのかと畢陵伽婆蹉に尋ねた。しかしこの時、世尊は守園人を許可していなかった。そこで瓶沙王は世尊の許可を得るように勧め、畢陵伽婆蹉は許可を得る。しかし瓶沙王は約束を忘れ、また部下も何

も言わなかった。瓶沙王が約束を思い出した時には500日が過ぎていたので500人の守園人を布施する。その後、祭の日に畢陵伽婆蹉は貧しさのため髪飾りが手に入らず泣いている守園人の娘に神通力で作った金の髪飾りを与える。しかしこの髪飾りが原因となり娘の一族は王に捕らえられる。これを聞いた畢陵伽婆蹉は金の髪飾りが神通力によるものである事を瓶沙王に示し娘達を救い出す。

- ②このことにより多くの人が仏教を信仰するようになり比丘に多くの食べ物を布施した。そのため比丘はたくさんの五種薬得たが全部、食べることができずそれらを地面に置いておいたので精舎が汚れた。これを見た居士は比丘の贅沢を非難しそれを聞いた長老比丘が世尊に申し上げて規則が制定される。

(①②は筆者が付けた)

以上が『五分律』の因縁譚である。一読しただけで「パーリ律」の因縁譚と非常に類似しているということがわかる。ただし注意すべき点が一つある。「パーリ律」は一度で規則が制定されているが『五分律』ではまず、上記の因縁譚により五種薬を一晩以上蓄えると突吉羅であると制定される⁽⁶⁾。その後、別の時に、多くの比丘が病気になったが浄人から薬を貰うことができず、買うお金もなくまた買う場所もなかった⁽⁷⁾。そのためどうしたらいいのか比丘達にはわからず困っていた。そこで世尊に相談した結果、病比丘は六夜の間、五種薬を蓄えることが許可される。その後、六夜を超えて蓄えていた比丘がいたため長老比丘が世尊に申し上げて改めて五種薬を得て七日を超えると尼薩耆波逸提という規則が制定される。

『五分律』ではまず五種薬を貯えてはいけないということから始まり、病気になった場合に限り7日間、貯えることを許可する。このように『五分律』は段階的に規則が制定されており突然、病比丘という言葉が出てくる「パーリ律」よりも「畜七日薬過限戒」の因縁譚として適しているのではないだろうか。

この他にも異なる箇所があり『五分律』の方が「パーリ律」よりもおおげさに書かれているという印象を受ける⁽⁸⁾。しかしながら「パーリ律」と『五分律』の「畜七日薬過限戒」の因縁譚は非常に似ており、同じ源泉を持つのではないかと考えられる。

3. 『四分律』『十誦律』『根本説一切有部律』の因縁譚

次に「畜七日薬過限戒」の因縁譚に「ビンビサーラによるアラーミカの布施」の記述がない『四分律』『十誦律』『根本説一切有部律』を検討する。

まず『四分律』だが⁽⁹⁾

畢陵伽婆蹉には羅閱城にたくさんの知り合いがいた。その人々から供養を受けて得た五種薬を畢陵伽婆蹉は弟子に分け与えた。弟子達は得たものを器などに入れて蓄えていたがそれがこぼれ出し房舎が汚れた。このとき房舎に来ていた長者たちは五種薬が飛び散っているのを見て比丘は王のように贅沢だと非難した。これを聞いた少欲知足の比丘はこのことを世尊に伝え、畢陵伽婆蹉の弟子達を叱責した後「病比丘に限り七日間、五種薬を蓄えることを許可する」という規則が決められる。

というものである。ただし『四分律』にはこの前にも因縁譚がある。そこでは多くの比丘が病気になったため五種薬が許可される。そしてそれに伴ういくつかの規則が制定されるがいずれも「畜七日薬過限戒」とは直接、関係があるものではない。そしてその後に黒石蜜を受け取ることが許される少し長い物語が続く。ただこれも直接関係がないと考えるべきであろう。

以上のように『四分律』には「畜七日薬過限戒」の因縁譚に必ずしも必要ではない記述があるものの、なぜ五種薬のみが許可されているのかということが書かれており全体として考えても「パーリ律」よりも「畜七日薬過限戒」の因縁譚としては適しているのではないだろうか。

次に『十誦律』だが⁽¹⁰⁾

畢陵伽婆蹉は王舎城で安居しており、そこに多くの知り合いがいた。その知り合いから五種薬をたくさん得て種々の器に入れて置いていたが、取り出すときに壁などにこぼして房舎を汚した。また畢陵伽婆蹉の弟子は得た五種薬を蓄えていた。

この時、王舎城で安居していたある比丘が舎衛国に行き、世尊に会い畢陵伽婆蹉とその弟子のことを話した。これにより比丘が集められて「病比丘に限り七日間、五種薬を蓄えることを許す」と決められる。

途中、「畜七日薬過限戒」とは関係がない「二時大会」の説明と客比丘のもてなし方に関する文章が入っている点は注意しなければならない。なぜここにそのような記述があるのかは不明であるが、しかし大筋では『四分律』と類似しており「畜七日薬過限戒」の因縁譚として適しているといえるだろう。

最後に「根本説一切有部律」だが⁽¹¹⁾

畢隣陀子の弟子はたくさんの薬を手にしており、また薬と食べ物を混ぜ一カ所に置き、捨てるべきものを捨てずそれらを食べたいときに食べていた。これを見た少欲な比丘は畢隣陀子の弟子達の行為を非難し世尊に彼らのことを伝えた。このことにより「病比丘に限り七日間、五種薬を蓄えることを許す」と決められる。

他の律では布施により五種薬を手に入れるが「根本説一切有部律」にはどのようにしたかは書かれていない。しかし大筋では『四分律』や『十誦律』と類似した内容で「畜七日薬過限戒」の因縁譚として適したものであり、特に問題は見あたらない。

以上、因縁譚に「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述がない『四分律』、『十誦律』、「根本説一切有部律」の因縁譚を検討した。その結果、いずれの場合でもピリンダヴァッチャかその弟子が規則制定の原因となって

いるということがわかった。またそれぞれの因縁譚の中心となる部分は非常に似ており、『四分律』、『十誦律』、『根本説一切有部律』の「畜七日薬過限戒」は同じ源泉を持つのではないかと考えられる。

4. 『摩訶僧祇律』の因縁譚

次に『摩訶僧祇律』だが、すでに検討した「パーリ律」、『五分律』、『四分律』、『十誦律』、『根本説一切有部律』の因縁譚ではピリンダヴァッチャかその弟子が規則制定の原因となっていた。しかし『摩訶僧祇律』にはピリンダヴァッチャも弟子も出てこない。

まず最初に難陀と優波難陀が五種薬を蓄えておりそれが溢れ出しているのを世尊が見る。次に優波難陀が鉢いっぱいのお蜜を持っているところを見た世尊は何にもちいるのかを聞く。難陀が病気なので薬として使うと答えた優波難陀に量が多いことを問う。優波難陀は一日中、飲むためであると答えるが世尊は薬を蓄えて一日中飲むということを禁止する。次に病比丘に会った世尊は一日中、薬を飲んではいけないという規則のために病の治りが遅いということを知り病比丘に限り薬を一日、蓄えることを許可する。

ここまでの因縁譚は少々の混乱はあるもののそれなりに整合性があると言える。しかし世尊が薬を一日、蓄えてもいいと許可した後で突然、一番最初の難陀と優波難陀が五種薬を蓄えていたというところに話が戻る。世尊は難陀に五種薬を蓄えていた事を問い今後、多く蓄えることを禁止する。

そして最後に出家する以前、医者であった比丘が病比丘の看病をしており、そこに世尊がやってきて病比丘の具合を聞く。看病していた比丘は毎日、薬を取りに町まで行くので自分が疲れているということを伝える。それを聞いた世尊は何日間、薬を貯えることができれば病比丘の病気は治るか尋ねる。看病比丘は7日と答え、このことにより「病比丘に限り七日間、五種薬を蓄えることを許す」と決める⁽¹²⁾。

以上、簡単に『摩訶僧祇律』の「畜七日薬過限戒」の因縁譚をまとめたが、『摩訶僧祇律』の因縁譚が混乱しているということがわかるのではない

だろうか。また他の律の因縁譚ともまったく異なるものである。ではなぜこのような違いが生じたのであろうか。現時点では正確なことはわからない⁽¹³⁾。ただ『摩訶僧祇律』の因縁譚にのみ「七日間」の根拠が書かれているということは注意すべきであろう。しかし今回は『摩訶僧祇律』は考察の対象外とする。

5. 結 論

以上、広律における「畜七日薬過限戒」の因縁譚を検討した。そこで以下において最初に問題として設定した「なぜ「畜七日薬過限戒」の因縁譚にビンビサーラによるアーラーミカの布施が書かれたのか」を検討し、結論とする。

まず因縁譚の内容で「畜七日薬過限戒」を分類すると「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述がある「パーリ律」と『五分律』、「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述がない『四分律』と『十誦律』と「根本説一切有部律」、どちらにも属さない『摩訶僧祇律』に分けられる。そしてここまでの考察において「パーリ律」と『五分律』の因縁譚が、また『四分律』と『十誦律』と「根本説一切有部律」の因縁譚がそれぞれ同じ源泉を持っているのではないかと考えた。では、それぞれを比べるとどうだろうか。

「パーリ律」と『五分律』ではピリンダヴァッチャが神通力を示して捕らわれたアーラーミカを助け出し多くの人々から布施を受けた。そのためピリンダヴァッチャやその弟子は五種薬をたくさん得てそれらを貯えた。そしてこのことが原因となり「病比丘に限り七日間、五種薬を蓄えることを許す」という規則が制定される。一方、『四分律』と『十誦律』と「根本説一切有部律」では知り合いから布施された五種薬を蓄えたことが原因となり「病比丘に限り七日間、五種薬を蓄えることを許す」という規則が制定される。こうしてみると「パーリ律」、『五分律』の因縁譚の後半部分（上で見た②の部分）と『四分律』、『十誦律』、「根本説一切有部律」の因縁譚はほぼ同じであ

るといえないだろうか。言い換えると「パーリ律」と『五分律』の「畜七日薬過限戒」の因縁譚から「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述をのぞくと『摩訶僧祇律』以外のすべての律が同じ因縁譚を持っているといえるのである。以上のことから二つの可能性が考えられる。それは、

- I. 「畜七日薬過限戒」には元々、「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」という記述があり後代になって『四分律』、『十誦律』, 「根本説一切有部律」から削除された。
- II. 「畜七日薬過限戒」には元々、「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」という記述はなかったが後代になって「パーリ律」と『五分律』に挿入された。

である。では、どちらが正しいのだろうか。

すでに見たように『四分律』、『十誦律』, 「根本説一切有部律」の「畜七日薬過限戒」の因縁譚には「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」は書かれない。しかし『十誦律』と「根本説一切有部律」, そして『摩訶僧祇律』は他の箇所「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」が書かれているのである⁽¹⁴⁾。このことからもしIのように考えるなら『十誦律』と「根本説一切有部律」は「畜七日薬過限戒」にあった「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」という記述を削除しその後、異なる場所に挿入したということになる。一方、IIのように考えるとそれぞれの律の編纂者が各自の都合に応じて「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」を現在の場所に挿入したと考えられる。削除するということは、その記述は必要がないということであろう。しかし「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」は律に書かれていることから必要な記述だといえる。そのため、後代に挿入されたと考えるのがより自然ではないだろうか。

それでは最後にいつ頃、どういった理由によってアーラーミカに関する記述が挿入されたのかを考える。まず、いつ頃ということについてだが、これ

やはり律が部派にわかれた頃、つまり部派分裂の頃と考えるべきであろう。理由は上記の通りである。次に挿入された理由だがそれは「仏教が正式にアーラーミカを認めるため」だったのではないだろうか。もちろん初期の時点からアーラーミカと同じような役割、つまり比丘にはできない仕事をかわりにおこなう人は存在していたであろう。例えば優婆塞が考えられる。しかし仏教として正式にはアーラーミカを認めていなかった。このことはビンビサーラがアーラーミカを布施するときに世尊が許していないという理由でピリンダヴァッチャが断ることから考えてもおそらく間違いないであろう。だが部派に分かれた頃に何らかの理由で仏教僧団としてアーラーミカが必要となった。しかしその時点では律を変更することはできなくなっていた。そこで、上にも書いたがそれぞれの律の編纂者が現在の箇所にもアーラーミカに関する記述を挿入したのではないだろうか。このことから、アーラーミカが正式に仏教僧団の一員となったのは部派分裂の前後であると考えられる。

今回「畜七日薬過限戒」の因縁譚を検討することにより、仏教におけるアーラーミカの成立について考えた。その結果、アーラーミカが仏教において正式に認められたのは部派分裂前後ではないかという結論が得られた。

アーラーミカという存在はその役割により仏教の「布施されたものによってのみ生活する」という理念を大きく変える可能性を持っている非常に重要な存在である。そのため今後も継続してアーラーミカについて調査していきたい。

注

- (1) Vinaya piṭaka Vol. III, pp. 248-252.
- (2) この点に関しては山極伸之「律蔵にあらわれる ārāmika」(『印度学仏教学研究』第94号, 1999年3月, pp. 173-178) 等において指摘されている。
- (3) 平川彰『二百五十戒の研究』II (平川彰著作集第15巻, 春秋社, 1993) p. 430.
- (4) 『大正大蔵経』22, pp. 30c-31c.
- (5) 原文では「飛在空中塗(聖)灑所住房」となっている。『大正大蔵経』22, p. 30c.
- (6) 五種薬と書いたが『五分律』は「酥・油・蜜・石蜜」の「四種含消薬」としてい

る。このことに関しては平川『二百五十戒の研究』II, p. 432に「すなわち『パーリ律』は酥を熟酥 (sappi) と生酥 (navanīta) とにわけているので「五種菓」となっているが、『五分律』はこれを分けないので、酥・油・蜜・石蜜の「四種含消菓」となっている」とある。

- (7) ここに書かれている「浄人」がアーラーミカかどうかは不明である。しかし『五分律』の「畜七日菓過限戒」の因縁譚は「守園人」としている。なお原文は「不能得淨人從日日受」である。『大正大藏経』22, p. 31c.
- (8) 『国訳一切経』律部13, p. 129, 注10に「五分律の空中に飛在して自ら塗灑せる記述と巴利律の人をして掃はしめたる記述とは相違せり五分律の記述は誇大なり」とある。
- (9) 『大正大藏経』22, pp. 626c-628c.
- (10) 『大正大藏経』23, pp. 60c-61c.
- (11) 『大正大藏経』23, pp. 759b-760a.
- (12) 『大正大藏経』22, pp. 316b-318b.
- (13) 平川彰は『二百五十戒の研究』IIのp. 435において「以上、上座部諸律には畢陵伽婆蹉の因縁譚が中心となっているが、しかし『僧祇律』は大衆部が伝持した律であるために、早くから上座部と分かれたためか、畢陵伽婆蹉の因縁譚を持っていない」としている。
- (14) 『四分律』には「ビンビサーラによるアーラーミカの布施」の記述はない。山極『律藏にあらわれる ārāmika』p. 176.